

ネギ

農研機構 東北農業研究センター
福島研究拠点
山崎 篤

「野菜の花」とは、あまり目立たないものというイメージかと思う。本稿のテーマであるネギについても、本来は花を咲かせないように栽培する作物であり、生産の場では目立たない花のはずだが、一般的にはそうでもないらしく、家庭菜園では収穫し残したネギは春先に抽台してくる確率が高く、またネギの花全体が坊主頭を連想させるからか「ねぎぼうず」という親しみのある名でも呼ばれており、ねぎぼうずが乱立する姿は身近なところで結構目立つ。春の風物詩でもあり、俳句の季語ともなっているし、いけ花の素材として使われることもある。さらに、ネギの花は擬宝珠、葱花葎などの形で美術意匠として橋や宗教施設、そして皇室の調度品などにも登場し、1000年以上の歴史を持つ存在でもある。農業関係者としての我々の印象ではやっかい者であるネギの花が、なぜそんな特別に扱われているのか不思議でもある。

本稿では、ネギが花を咲かせる仕組み、それが農業上どのようなインパクトを与えているのかを一通りおさらいした上で、ネギの花の歴史・美術などの世界における存在について、様々な分野の資料に当たり文化史的視点から迫ってみた。

1. ネギの日本への導入

ネギの祖先種とされている *Allium altaicum* Pall. はモンゴルから南シベリアにかけて分布しており、ネギの進化のスタート地点もそのあたりと考えられる。中国の平原地域に至って栽培植物化され、各地の気象条件に適応した多数の品種分化が進み、その一部が日本にも朝鮮半島から、あるいは中国本土からそれぞれのルートで渡来したが、その時期は明らかでない(位田 2014)。しかし、日本書紀巻 15 中では仁賢天皇 6 年(493 年)に「秋葱」として登場しており、その頃既にネギが栽培され身近にあったことがうかがえる(小笠原・木村 2020)。また「延喜式」(927)にも、内膳司(宮中の附属農園)における栽培法について記述があり、既にその頃には宮中でも普段に食されていたのであろう。その後の長い栽培史の中で、東日本では葉鞘部に土寄せして軟白し根深ネギ・一本ネギとして、西日本では主に葉ネギとして地上部全体を、それぞれ食するようになり、地域性と密接に結びついたわが国独自の品種分化が進んでいった。

2. ネギの花芽分化および抽台・開花の様相

ネギは緑植物春化型というタイプの植物に分類され、一定以上の大きさに達した植物体が冬期の低温に遭遇したのち、成長点が花芽分化する。分化した花芽は春の高温長日下、葉鞘の中で発育伸長し、いわゆるネギ坊主が現れ急速に伸長、開花に至る(図-1)。なお成長点が花芽分化したしばらく後にその脇に側芽が形成され、株としては栄養成長を再開する(図-2)。坊主の先端が葉鞘の中から現れる頃までは比較的柔らかく、花茎を食べる野菜としてのニラやニンニクのように一般化はしていないが、かき揚げや煮付などにして食することができる。しかし、それ以降は花茎の繊維質が発達しとても硬くなるため、食用には不適となる。花茎の硬さを示す逸話を 2 つ。蛸を捕まえてネギ坊主の花茎の中に入れる



図-1 ネギの花(花房)3態

左：抽台が始まった、右上：総包(花房全体を覆う膜)が破れ、頂部の小花から開花が始まったところ、右下：ほとんどの小花が開花したところ

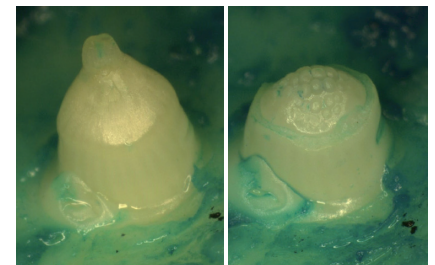


図-2 ネギの花の小花形成中期の顕微鏡画像
左：総包が付いた状態、右：総包を剥いた状態。頂部に小花の分化が始まったのが確認できる。いずれも左下に側芽が発達しつつある。

と全体が青白く光り、それを振り回すと蛸が集まってくるという遊びがあったという子供の頃の記憶が、あるエッセイの中で紹介されている(松阪 1997)。また、ネギ畑で抽台茎を引き抜くと、スポン！という音がするのを楽しんだ、とのエピソードもある(みなみ 1993)。ネギ坊主の使用例としての蛸狩り?には驚かされたが、音の方は私も仕事に何度も経験した。皆様の中にもそのような遊びを経験された方はおら

れるでしょうか。

根深ネギ・葉ネギを問わず、農業生産の場では抽台・開花を避けられるような品種・作型そして栽培管理技術が選択されているものの限界もあり、抽台後の期間も含め4～6月はネギが品薄になり、端境期となって単価も高くなる傾向にある。この時期には、花芽分化しにくい栄養繁殖性の‘坊主不知’という品種の出番となるが、分けつ性が強く一本ネギとしてはあまり品質がよくない。関係者は毎年この時期苦労してきた。しかし1990年代に入り、業務・加工需要を中心に周年供給へのニーズの高まりを背景に、晩抽性育種および花芽分化とその制御に関する研究が進み、端境期は少しずつ埋まってきた。実際に、ここ数十年ネギの国内生産量は横ばいないし漸減状況で、国内では生産量が減っていない数少ない野菜のひとつであるが、時期別にみると変遷しており、端境期の解消が進んだことによって春～初夏期の生産が増加する一方、旬の季節である秋冬期の生産が減少しており、周年生産化が進んでいる。

さて、ネギの花芽分化の様相をみてみよう。ネギでは花芽分化を促進する主たる要因は低温である。低温として有効な温度域は、品種にもよるが3～15℃とかなり広く、またその要求量には大きな品種間差がある。さらに温度反応として注目すべきは、夜間の低温による花成促進効果（春化）が昼間の高温によって打ち消される「脱春化」状態が毎日蓄積されることにより花芽分化を抑制できることがわかり、詳細な調査とともに抽台抑制の実用化試験に広く取り組まれた。その結果、ダイコンやニンジン等と同じように、冬期の間トンネル被覆を密閉することで晴天時の高温を確保して脱春化を誘導し、抽台を抑える「トンネル5、6月どり作型」が確立され暖地を中心に普及した。このことが上述した端境期の解消に貢献した。

これら温度への反応は品種間差が幅広で育種の余地が大きい。単に低温要求量の大小のみならず、低温に感応可能となる植物体の大きさや、脱春化の始まる温度など複数の要因が関与しており、これらの特性をうまく引き出しながら晩抽性育種が行われている。

一方、温度の他に日長も花芽分化に大きく影響し、ネギの

花芽分化は短日下で促進される。従って、低温遭遇中の長日によって花芽分化が抑制されるが、実際には長日処理を圃場で行うことは難しく、実用的には利用しにくい。また、試験例は限られるが日長反応にも品種

間差がある。ただ、これまでのネギ育種の歴史の中で、日長反応について選抜をしたことはなかったと思われ、まだ新たな育種の余地があるように思う。

低温に感応可能となる植物体の大きさの問題も重要である。冬が来たときに低温に感応する大きさに達しないようにするため、古くから「ネギは彼岸過ぎに播け」などと早まきを戒めることで抽台を避けていた。この植物体の「大きさ」は正確に言えばサイズではなく生育段階（出葉数）のことであり、品種間差がある。一方で、先にネギは緑植物春化型と書いたが、低温要求性がほとんどなく種子春化型に類似した反応を示す台湾の「北葱」という品種も知られる。夏期以外の3シーズンに抽台が見られるかわりものである。

以上、花芽分化要因について概説したが、詳細は別書（山崎 2014; Yamasaki and Tsukazaki 2023）を参照されたい。

先に、花芽分化の両極にある「坊主不知」や「北葱」というかわりものを紹介したが、その他に、花茎の先端に花ができず、かわりに珠芽と呼ばれる小苗が形成される「ヤグラネギ」という変種がある（図-3）。農家の庭先に自家用として植えられているのをたまに見かけるが、広く全国的に分布しているようである（青葉 2013）。花茎の先端に珠芽を着生する「やぐら性」はネギの他にタマネギやニンニクにも見られ、花が苗になってしまいもっぱら栄養繁殖をする不思議なかわりものである。

3. 「ねぎぼうず」に関する文化史的視点から

ネギを研究しつつ、「擬宝珠（ぎぼし、ぎぼうし、ぎぼうしゅ）」のことがずっと気になっていた。ネギの花（正確には花蕾（総包に包まれた開花前の花房））の形状を見立てて



図-3 ヤグラネギ
(写真：小笠原 慧氏)



図-4 三条大橋（京都）の擬宝珠
（写真：木幡裕介氏）
擬宝珠の一つには、池田屋事件でついでと伝わる刀傷が残っている。



図-5 上ノ橋（盛岡）の擬宝珠
（写真：塚崎光氏）
南部政行が上京の折に勅許を得た特別な橋だと認識されていたと考えられる。第二次大戦中、金属不足のなかで供出させられそうになった直前に国の重要美術品として指定され、難を逃れた。



図-6 大正天皇大喪における葱花輦（当時の絵はがきより）
八瀬童子が東京に上り担いだ。



図-7 北野天満宮のずいき祭の巡行における葱花輦（写真：藤目幸廣氏）
ずいき祭では、鳳輦には主祭神・菅原道真が、葱花輦には道真の嫡男がのるといふ。

いと多くの文献に書かれているのだ。「ネギの花のかたち」がイメージしにくい方々には、タマネギの球の形と言ったほうがわかりやすいかもしれない。美術・建築等の装飾における意匠を示す言葉であり、由緒ある橋や仏堂・仏塔や神社本殿等の高欄（欄干）や屋根などには、この擬宝珠の意匠で装飾されているものをよく見かける。それって何？とピンとこない方も、写真を見れば思い出せるはず（図-4, 5）。落語「擬宝珠」で、浅草寺五重塔に載っている擬宝珠が緑青をふいているのがオチにつながるように、多くは青銅製である（原話は江戸時代後期の噺本）。ほかに有名なところでは日本武道館の屋根にも載っている。

擬宝珠とネギの関係が気になるけれど、まずは擬宝珠の由緒をたどろう。擬宝珠は文字通り「宝珠」を擬（なぞら）えたものという意味とされる。宝珠とは如意輪観音などの仏像が手に載せている仏具の一種で、願い事が叶う聖なる力のシンボルであり、日本には仏教伝来とともに伝わったと考えられ、この宝珠に支えの柱（花茎にあたる）をつけたものが擬宝珠の起源と多くの文献に書いてあるが、表記として「木帽子」や「金帽子」という例もあることから、帽子の観念とその形とが関連しているとの説もあるし、「葱宝珠」（葱は音読みで「キ」）と書かれる例もある。

これら様々な擬宝珠の中で、国内に現存する最古のものは、平城京（710～784）跡から出土した陶製の擬宝珠で、二条大路上の交差点の側溝にかかる橋の欄干を飾ったものとされる。二条大路はメイン道路だったから特別に擬宝珠で装飾されたようだ（田中 1984）。だから意匠の成立自体は遅くとも8世紀頃といえ、擬宝珠の歴史は1200年以上も遡るのであるが、ネギの花との関連は後付けであるとされている。

他にネギに関わる意匠として、「葱花（華）輦」というものがある。これは、人を乗せて肩に担ぎ上げて移動する輿の一つで、「輦」とは輿のなかでも格式の高いものをいう。屋根にネギの花状のオブジェが乗っており、天皇の略式の乗物として主に仏神事での外出に用いられたという。いずれデザインは擬宝珠に近いが、こちらは名称の中に「葱花」が使われており、ルーツが異なるようでもある。皇室の乗り物としては、ほかに輿の屋根に鳳凰を載せた「鳳輦」があり、鳳輦の略式版として葱花輦が作られたとされるが、成立時の経緯は明らかではない（橋本 1994）。明治天皇以降代々の天皇の大喪において葬列の際に葱花輦が用いられ、担ぎ手である八瀬童子の存在とともに当時はかなり話題になった（図-6）。

「枕草子」260段の中で清少納言が「今ぞ御輿出でさせ給ふ。（中略）朝日はなばなとさしあがるほどに、なぎの花（ここではネギと考えられている）いと際やかにかがやきて（後略）」と、中宮定子が乗る葱花輦が担がれ、屋根上の葱花が朝日に輝くさまを描いている。ネギの花も、清少納言が表現するとこれほどきらびやかになるのかと感銘する。

天禄元年（970）に京都八坂神社で祇園御霊会が初めて行われたこと（祇園祭のルーツ）が「年中行事絵巻」に描かれ、

そこには神輿として鳳輦と葱花輦が揃って登場しており、既にこの頃には神の乗り物（神輿）としても葱花輦が使われるようになっていた。神社のお祭りの際に活躍する神輿の多くは鳳輦だが、葱花輦も登場する祭礼もある（図-7）。しかし、「葱花」輦という名前があるわりには、御輿における葱花輦の起源やネギとの関連性は不明な点が多い。

4. まとめ：ネギ花状の意匠の起源は？

これらの情報を少し強引にまとめてみると、我が国における擬宝珠や葱花輦といったネギ花状の意匠は、もともと仏教を通じて持ち込まれた宝珠のデザインが、その当時の仏教と神道があちこちで入り交じった神仏習合の時代的背景のなかで、両者の信仰に共通したオブジェとして使われるようになり、その意匠が尊い存在として宮廷にも導入され、輿のデザインに採用されたり重要な橋に取り付けられたりし、その後は後付け的にネギの花に関連付けられるようになったのではないかと推察している。意匠成立の時期は飛鳥時代後期～奈良時代に絞られてくる。問題はネギの花に見立てられるようになった理由であるが、単に形が似ているからだけではなく、薬用的にも重要な野菜であったネギの薬用効果を神聖なものとした（藤目 2016）、長く咲いていて散らない生命力の強さや縁起の良さにあやかっただけでなく、あるいは強い匂いが持つ魔除けの力を信じて、等が拳がっている。当時の人々はネギの生命力や薬効に神聖なものを感じていたのかもしれない。

だとしても、なぜ食用部である葉ではなくて花を尊んだのか、という疑問は残る。もう少しこだわってみたいので、少し仏教とネギとの関係について触れておきたい。禅宗一派では、「不許葷酒入山門」という、僧侶の修行の妨げになるネギ類や酒を避けるように戒めた規律がある。そうした寺院では、擬宝珠の代わりに逆蓮という蓮の花を逆さまにした意匠を高欄に採用していることが多く、ネギを避けているようでもある。実態としても、江戸時代の百科事典「古今要覧稿」に、「ネギの花が天皇の乗る輿の屋根に載っていたり橋の欄干に見えるのは、太古からの相伝であり非常に深意あることだ、さらに邪気を払い滋養にも優れる野菜なので、これを仏門に倣って忌み嫌うことはよくない」と仏教の戒めに疑問を呈



図-8 川端龍子作「葱曼荼羅」（金井紫雲著「蔬果と芸術」（国立国会図書館デジタルコレクション）より）

ネギの花の部分に光背に見立てて描かれている。

しつつ、ネギは尊い植物であり体にも良いから一般人はもっと食べよう的な見地で書かれている。少しうがって考えると、仏教の立場からは食用部分である葉は避けたいが、花は食べないから可、と整理していたのかもしれない。

また、江戸中期、伊藤若冲晩年の異色の水墨画「果蔬涅槃図」には、80種以上（諸説あり）の野菜と果実が登場するが、何故かネギ（に加えてゴボウ、ニンジンも）が描かれていない。青物問屋の主人でもあった若冲のこと、あえて外したのだろうと思われ、そこには伊藤（2008）も書くように仏教への配慮が感じられる。他方、時代が下って近代日本画家の川端龍子に「葱曼荼羅」という作品があり（金井 1933）、抽台したネギが3本、その花蕾を光背に見立てて阿弥陀三尊の姿が小さく描かれている（図-8）。若冲とは逆にこちらはあえてネギを題材にしたはずで、仏教界では避けられているネギを選ぶ特別な理由が画家にあったのかもしれないし、花を主題に描くことで仏教の戒めをかいぐろうとしたのかもしれない。

少し話が脱線するが弘法大師にまつわる言い伝えがある。京都の東寺付近で大蛇に追いかけられた大師がネギ畑に隠れて難を逃れたという逸話があり、その後東寺周辺の人々には、大師の毎月の縁日にはネギ畑に入らない、またネギを食べない等の風習が割と最近まであったという（植木 1972）。大の大人が隠れることができるのであればちょうど開花期だったのでは、などと想像を馳せてみる。

一方、先にネギ坊主はいけ花の素材でもあると書いたが、池坊の流派では、花伝書として16世紀前半に活躍した池坊専応の理論が口伝として流布しており、春山（1956）によると、ネギは祝言に用いてよい花であるが高くいけてはならない、と伝わっているらしい。わが国では随分前からネギの花の鑑賞価値が認められていたことは特筆すべきかと思う。先述した清少納言の感じ方などもあり、そんな日本人独特の感じ方が、聖なる宝珠のデザインをネギの花に見立てるようになった背景にあるのではとも思われる。とはいえ、擬宝珠の意匠をネギの花に見立てる動機としては十分か、という

まだ疑問も残る。

と、ここまでまとめてみたところで改めて調べ直したら、日本に入ってくる前から既にこの意匠にネギが紐付けられていたという説を見つけてしまった。平安時代の「楊氏漢語抄^{ようしかんごしょう}」という当時の漢語解説書の中の記述として「葱台は橋の両端にある柱で、頭の形がネギの花に似ているのでそう称される」と解説されていることを示した久保(1967)は、今の擬宝珠の意匠を指す語として「葱台」という表現が当時すでに中国で使われており、ネギへの関連付けは中国から伝わったとし、伝来後、葱宝珠→擬宝珠と、通説とは逆の順番に漢字が変化したとしている。ただし、葱台あるいは擬宝珠に相当する意匠が中国の文献や絵画に余り見つからない点については再検討の余地ありとしている。

更にもう一つ、葱花輦についても、先ず奈良時代に中国から葱花輦が導入され正式な輦として用いられ、その後、葱花輦より格の高い正式な乗り物として、鳳輦が天皇専用にならされたという、これも通説とは逆の順番になる説が最近出てきた(藤澤 2017)。

これらの情報を目にして以来、私も急にこちらの説に傾き始めている。しかし、これらを確認するには唐時代の中国におけるネギ花状意匠の使用例を渉猟する必要があり、私の調査もここまでが限界のようだ。

5. 世界に目を向けると、

そういえば、この形、時節柄マスコミでよく目にするようになったクレムリンの建物の中にもある。確かに、ロシア正教会の塔のドームの形にはネギ花状のデザインが多くみられるし、北欧の木造教会等、キリスト教世界にもネギ花状のドームを持つものが少なくない。同様のドームはイスラム世界のモスクの屋根にもあり、有名なインドのタージマハルもそうだ。つまり、世界に広く共通して、ネギ花状の意匠が宗教横断的に用いられているのだ。海外では、その形状から球根状ドーム (bulbous dome もしくは onion dome) と称されている。ただしこの場合、あくまでも形状からの見立てで、ネギやタマネギと関連付けられているわけではない。これらのルーツを明らかにできるものは現在残っていないが (Block

2013)、もともとインドに起源を發するストウーパ (仏塔) の卵形ドームと石窟寺院にみられる尖った馬蹄形ドームとが組み合わさったデザインが、7世紀以降にシリアで誕生し、それがベースとなって13世紀にロシアで木造建築として造られ始めたのが起源とされていて (Born 1943)、だとすると、意匠としてはやはり仏教がルーツということになるようだ。時代考証的には、シリアで onion dome の原型ができあがった時期は、わが国でネギ花状の意匠が用いられるようになったのと同じ頃であろうと推測できる。今後、これらの起源について中国やインドにも広げて探索する必要があるようだが、わが国の擬宝珠等も含め、これら世界に共通したネギ花状の意匠の起源はインドの仏教である可能性が高い。

本稿の特に後半部をまとめるにあたり、京都府立大学名誉教授藤目幸擴先生、(株)トーホク育種部小笠原慧さん、そして名古屋園芸雑花園文庫から貴重な情報や資料・写真をお寄せいただきました。また、農研機構東北農業研究センターの塚崎光、木幡裕介両氏からも写真の提供を受けました。同じく東北農業研究センター図書室の中村明子さん、そして福島県立図書館一般資料チームの石川さんはじめ皆様には情報収集にあたりたいへんお世話になりました。この場を借りまして皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 青葉高 2013. 日本の野菜文化史事典. 八坂書房.
Block, E. 2010. Garlic and other Alliums. RSC Publishing, UK.
Born, W. 1943. The origin and the distribution of the bulbous dome. J. Amer. Soc. Architectural Historians. 3: 32-48.
藤目幸擴 2016. 京野菜の成立と発展. 京都園芸. 102: 34-39. 京都園芸倶楽部.
藤澤桜子 2017. 皇室紋章の起源と変遷. 広島大学文学研究科学学位論文.
橋本義則 1994. 古代御輿考. 古代・中世の政治と文化 (井上満郎・杉橋隆夫編). pp.29-67. 思文閣出版.
春山行夫 1956. 花の文化史 第二集. 中央公論社.
位田晴久・山崎篤 2014. 原産・来歴と品種文化. 新訂ネギの生理生態と生産事例 (農耕と園芸編集部編). pp.10-17. 誠文堂新光社.
伊藤信博 2008. 「果蔬涅槃図」と描かれた野菜・果物について. 言語文化論集. 30, 3-24.
金井紫雲 1933. 蔬果と芸術. 芸艸堂.

久保常春 1967. 仏教考古学研究. ニュー・サイエンス社.
 松阪龍雲 1997. 葱坊主に寄せて. プランタ. 51: 35.
 みなみらんぼう 1993. 野菜の花 (丸善フォトブック). 丸善.
 小笠原慧・木村淳 2020. 九条ネギの歴史に関する考察と京都に残る九条系一本ネギについて. 和食文化研究. 3, 136-147.
 田中琢 1984. 平城宮—古代日本を発掘する 3. 岩波書店.
 植木敏弉 1972. 京洛野菜風土記. 伊勢秀印刷所.
 山崎篤 2014. 花芽分化・抽だい. 新訂ネギの生理生態と生産事例 (農耕と園芸編集部編). pp.87-97. 誠文堂新光社.
 Yamasaki, A. and H. Tsukazaki 2023. Bunching onion. In 'Edible Alliums: Botany, Production and Uses' (Rabinowitch, H.D. and B. Thomas, Eds.). CABI Publishing, UK. (in press).

その他参考図書

辞典・事典類 国史大事典, 広辞苑, 日本史大事典, 日本全史: ジャパン・クロニック, 精選版日本国語大辞典, 帝国大事典, 仏像装飾持物大事典, 等
 古典 安齋随筆 (伊勢貞丈), 枕草子 (清少納言), 古今要覧稿 (屋代弘賢)
 その他 赤堀又次郎: 読史随筆, Dunber, E. and C.Mahoney: Gardeners' Choice, 深見奈緒子: 世界のイスラーム建築, 廣瀬忠彦: 古典文学と野菜, INAX BOOKLET Vol.11: 木瓦と葱ぼうず, 泉屋博古館: フルーツ & ベジタブルズ — 東アジア蔬果図の系譜, Jay, M.: Onions and Garlic: A Global History, 前 久夫: 寺社建築の歴史図典, 櫻井芳昭: 興 (こし) ものと人間の文化史, 宇江佐真理: 擬宝珠のある橋〜髪結び伊三次捕物余話, 等

くまぐま 田畑の草種

酸い葉 (スイバ)

昨年(2022)の5月, 県で一番大きいといわれるK川の土手を歩いているときそれを発見した。発見したなどという大げさだが, その一群が繁茂していたのである。思わず1本ぼきりと折り取ってしがんでみた。ただ酸っぱいだけであった。これが半世紀ぶりに口にしたスカンポであった。

その前は一気に学生時代にまで遡る。ワンダーフォーゲル部で先輩について山を歩くとき, のどが渇いてもその当時はなかなか水が飲めなかった。そんなとき川沿いの道に生えていたスカンポを折り取ってしがんだ。先輩は咎めもせずその酸味が喉を癒してくれる, と言ったものであった。

スカンポとの最初の出会いは小学校の低学年頃だったかと思う。当時, 街には住んでいたが, 周りにはまだまだ田んぼや畑があった。近所にはもう中学校に上がっていたかと思う兄貴分のMがいた。ある時, 遠征と称してずいぶんと遠くまで出かけた事があった。歩き疲れて「喉が渴いた」というと, 兄貴分のMが「これをかじってみな。ほんまはな, 折ったとこに塩を付けるとうまいんや」といって折り取ってくれたのがスカンポであった。

それから間もなくか何年かしてからか覚えていないが, 小学校の音楽の時間に「すかんぼの咲くころ」という唱歌を習った。

(公財)日本植物調節剤研究協会 兵庫試験地 須藤 健一

「土手のすかんぼ ジャワ更紗 屋は蜚が ねんねする 僕ら小学一年生 (原詩は尋常科) 今日も通って また戻る すかんぼ すかんぼ 川のふち 夏が来た来た ドレミファソ」(詩: 北原白秋, 曲: 山田耕筰)

「一年生」のところは「六年生」だったかもしれないが, 「ジャワ更紗」の何たるかも知らず, スカンポは蜚が寝るところなのだと思いつつも, あの時に食べた蜚の寝床がスカンポだったのだと知るには, さらに年が過ぎてからであった。

スカンポは「スイバの別名」であり「イタドリ」の別名でもある。半世紀以上前のスカンポを思い出すのは無理があるが, 学生時代や昨年(2022)の5月に出会ったスカンポは, 葉の付き方からすると「スイバ」であった。

スイバはタデ科ギシギシ属の多年草。北海道から九州までの畦畔, 土手, 道端などに普通。背丈は50cmから80cmほど, 大きくなると1mにもなる。茎葉はところどころ赤みを帯び, 根生の葉は矢尻形で, 上部の葉は茎を抱く。茎や葉を口に入れて噛むと酸っぱいので「酸い葉」と名付けられた。雌雄異株で, 雄株は黄色っぽい淡紫色の小花, 雌株は淡紅紫色の小花を穂状につける。北原白秋は, この花が川の土手に群生して咲くのを見て「ジャワ更紗」を連想したのかもしれない。